



KIOKU • AYA NISHITANI

# 記憶

西谷史



---

き おく  
記 憶  
にしたに あや  
西谷 史

角川ホラー文庫 H69-1

11299

---

平成11年12月10日 初版発行

発行者——角川歴彦

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3

電話/編集部(03)3238-8451

営業部(03)3238-8521

〒102-8177 振替00130-9-195208

印刷所——新興印刷 製本所——千曲堂

装幀者——田島照久

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

落丁・乱丁本はご面倒でも小社営業部受注センター読者係にお送りください。

送料は小社負担でお取り替えいたします。

©Aya NISHITANI 1999 Printed in Japan

定価はカバーに明記してあります。

---

ISBN4-04-410421-2 C0193

# 記憶



目次

記憶

解説

高井信  
三三

五



## 序 章

鬱蒼<sup>うつそう</sup>と繁る原生林に囲まれて、奥多摩湖の湖面は波一つたたず、鏡のように銀色の三日月を映していた。

湖面から垂直にせりあがった崖<sup>がけ</sup>の上には、街路灯もなくうねうねと曲がる暗い道が、どこまでも続いている。その道を、ヘッドライトを消した乗用車がゆっくりと走っていた。運転席でハンドルを握っているのは、内村剛司<sup>うちむらたけし</sup>という巡回中の若い巡査である。

窓をいっぱいに開き、風に混じるどんな気配も逃すまいと、内村は鋭い目であたりを見回して、ヘアピンカーブを曲がった。

ルームミラーに目をやると、鏡面には曲がりくねった道が延々と続くばかりで、後続車の姿はない。かつて深夜の奥多摩湖岸道路は、暴走族の溜まり場になった時代もあるが、いまでは夜間通行止めになっているのだ。

半年前まで渋谷署<sup>しごや</sup>の少年課に勤務していた内村は、盛り場を巡回中、レイプされかけた女子高校生を救い、相手の男を逮捕した。

だが取り調べが始まると女は証言を翻し、レイプはでっちあげで、内村が連れの男に暴

行したと訴えたのだ。

やがて裁判が始まり、男の両親が雇った<sup>すこうで</sup>凄腕の弁護士が、内村の供述を次々にひっくり返していった。

かろうじて和議に持ち込むことで免職は免れたものの、職務を遂行して少女を助けただけなのに、内村は平の巡査に降格されたりえ、<sup>おうめ</sup>青梅警察署の中でも人家の少ない奥多摩の交番に左遷された。理不尽すぎるその事件は、彼の人格を大きく変えた。

それ以来、彼の胸には一時として休まることのない怒りと、ある種の若者に対する深い怨みが根付いていた。

最近青梅警察署の管内では、深夜の私有林に入り込み、オフロードバイクやクロスカントリ用のRVを乗り回すライダーへの苦情が増えている。

彼がその取り締まりをかって出たのは、ライダー達が彼を陥れた若者と同じ種類の人間に思えたからだ。

他人の迷惑を顧みずに、自らの欲望だけを追いかけている奴を、一人でも多くとつかまえてやる。それは事件以来、彼の生きがいになっていた。

だが敵もさるもので、山中を乗り回すときは必ず見張りを置いて、警察に捕まるようなドジは踏まない。

いまでも窓から吹き込む風に、獣の遠吠え<sup>とおほ</sup>のようなオフロードバイクのエンジン音が混じった。

「今夜こそ、捕まえてやるぞ」

ぎりっと歯を食いしばって奥多摩大橋のアーチを潜り抜けたとき、突然目の前を稲妻が駆け抜けて、身体がびりりと痺れた。

一瞬目の前が真っ白になり、思わずブレーキを踏んで車を止めた。しばらくしてショックが収まり、窓から顔を出して恐る恐るあたりの様子をうかがう。

だが空には満天の星が煌き、雷雲どころかはぐれ雲一つない天気だ。それに稲光にしては、雷鳴が聞こえないのも妙だ。

「いまのは、なんだったんだ？」

けげんそうに呟きながらスターターキーをひねると、頭の右側に針を突き刺されたような鋭い痛みが走った。

瞼を閉じたままこめかみに手をやると、痛みを煽るように、どこか遠くからバイクの音が聞こえてくる。

その音を聞いているうちに、腹の底から強烈な怒りが湧きあがってきた。

深夜の山林を荒らすライダーに対する怒りだけではない。危ないところを助けてもらったくせに、彼を裏切った女子高校生に対する怒り。他人に責任を押しつけることに血道をあげる弁護士。部下の無実を知らながら、見て見ぬふりをした上司に対する憤りが火を吹いた。

もともと内村は温和な男だ。こんな性急な怒りを感じることは滅多にない。

(きょうの俺は、なにか変だ……)

内村は、まだ完全に冷静さを失ったわけではなかった。巡回を中止して帰ったところで、だれかに責められるわけではない。風呂に入って、ビールを飲んでさっさと寝てしまった方が、よほど賢明というものだ。

だが、燃えくすぶる怒りが、そうすることを許さなかった。

(こんなところで、弱気になってどうする。俺は警察官なんだ。あいつらに法を守らせるのが仕事だ)

内村は、歪ゆがんだ正義感でためらいを振り切ると、アクセルを踏みこんだ。

一口に奥多摩といっても、山林は東京の最深部から山梨県、神奈川県の北部にまで広がっている。エンジン音だけで相手を見つけるのは、至難の技である。

いくつかの峠を越して、湖岸道路を半ばまで走破したとき、展望のいい崖の上に張り出した駐車場のRVが目についた。

内村はそっと車を道ばたに寄せてエンジンを切り、懐中電灯を片手にRVに向かって歩きはじめた。

最初は奴等の仲間が仮眠でもとっているのかと思ったが、よく見るとスプリングの利いた車体が微かに揺れている。

それでピンときた。若い男女が、中でお楽しみの真っ最中らしい。どうやらクロカンの暴走族とは関係なさそうだ。

(くだらん……)

いつもの内村は、アベックには寛大だ。自分も彼女を乗せてドライブするのが、唯一の趣味だった時代がある。だから、よほどのことがなければ黙って見逃してやる。

だが、なぜか今日は腹が立ってならなかった。車体が揺れる度に、どす黒い怒りが噴き上げてくる。

(若気のいたりだ。見逃してやれ)

理性が囁く。

だが内村は運転席に近づき、いきなり懐中電灯で中を照らしだした。

すると助手席の背もたれを倒し、交尾する蛇のように絡みあった二人の半身が白々と光の中に浮かび上がった。

女はスカーフで、手を後ろに縛られている。レイプではあるまい。暗闇に欲望をかきたてられた男と女が、ちょっと異常なセックスを楽しんでいるというところだろう。

ライトに照らされてほとんど反射的に身を引いた男は、下着もつけずに運転席に転がりこむと、スターターキーをひねった。

女は懐中電灯に照らされているのもかまわず、軟体動物のように身体を蠢かせて男に足を絡め、執拗に身体を押しつけている。

「バカ者めが……」

内村は不快感にはき捨てた。

男がアクセルを踏み込み、さっさと車を出していたら、あえて追いかけるはしなかっただろう。しかし、男は車を発進させなかった。

警官が一人だと気づくと、腹立ちまぎれに窓を開き、「邪魔すんじゃないやねえ！」と怒鳴った。

その瞬間、内村の胸の中で膨れ上がった怒りの泡が、プツツと音をたててはじけた。助けた娘に裏切られた時でさえ感じなかったドス黒い怒りが、血の流れに乗って身体に充満していく。

「お楽しみのところを悪いが、この道路は八時以後立ち入り禁止だ。分かってるだろ？」内村は懸命に自分の心を鎮め、気味が悪いほど優しい声で言った。

だが男にはその配慮が通じなかった。

「俺達が入ったのはもっと前だ。勝手に出口を封鎖されて、帰れないからここで夜明かししてんじやネエか。警察にどうこう言われる筋合いはネエ！」

女の手前、いいかつこうをしたいという気持ちもあっただろう。男は居丈高に怒鳴り返した。

瞬間、内村の怒りはもう理性では如何いかんともしがたい限界まで膨れあがった。沸騰する湯のように、次から次へと激情の泡が吹き上げ、手足がガクガク震えだす。

（殺してしまえ！　こんな奴は生かしておく価値もない）

右脳がズキッと痛み、もう一人の自分が残忍な叫びをあげる。

「結構なことだ。しかし、そっちの女性は腕を縛られているようだ。こんなところでSMごっこというわけかい？」

とってつけたような笑みで二人を安心させながら、内村は密かにベルトの警棒に手を伸ばした。

「ほっというて。あっちへ行つてよ！」

女が声をあげた瞬間、内村は目にも止まらぬ早さでジュラルミンの警棒を引き抜き、開いたウインドの隙間から突き入れた。

バキッと音をたてて男の頬の肉が裂け、骨が砕けた。

(やめろ！)

理性が悲鳴をあげる。だが、飛び散った血を見た途端、なにかも忘れるほどの強烈な快感が身体を貫いた。

半ば意識を失くしたまま、男は本能的にギアをDレンジに入れてアクセルを踏み込んだ。砂利を蹴散らし、内村を振り切って発進したRVは、道の反対側のガードレールにバンパーを擦って速度を緩めた。

噴き上げる激しい怒りは、もうどうにも止まらない。

狂ったように歯をむきだし、全速力で車に追いついた内村は、執念で窓から上半身を乗り入れると、男の髪を掴んで窓から引きずりだし、渾身の力を込めて後頭部に警棒を振り下ろした。

熟れた西瓜を叩き潰すように、グシャッと鈍い手応えが伝わってきた。

（やった！）

身体中の毛穴が開くようなエクスタシーの波が、脳天に駆け抜ける。

一方、あわれな男は、口と鼻から噴水のように血をまき散らして、路上に崩れ落ちた。

（思い知るがいい。私を裏切った報いよ。さあ、あの女も片づけて！）

激情の波とともに、聞いたこともない女の声が頭の中に響いた。それを異常と感じられないほど、内村は興奮していた。

「助けて……お願い……私は乱暴されてたのよ」

後ろ手に縛られた女は、淫らな下肢をむきだして哀願した。

「さっきとは、ずいぶん態度が違うな」

内村は、冷ややかに女を見下した。

「お願い、このスカーフをほどこいてよ。あなた警察官でしょ！」

女の叫びには耳をかさず、内村は瀕死の男をリアシートに放り込み、運転席に戻ってヘッドライトを消し、スターターキーをひねった。

「ねえ、助けて。お願いよ！」

淫らに裸体をくねらせて媚びる女を無視して、内村はゆっくりとアクセルを踏みこんだ。やがて工事車両がUターンするためにつくられた路肩の空き地に乗り入れると、内村はサイドブレーキを引いて車を止めた。

「助けて。助けてよー！」

どんなことをしても彼の気を引けぬと悟り、女の身体から淫らなオーラが消えた。白い肉体を震わせ、女はひたすら泣き、子供のように哀願した。

渋谷で助けた女子高校生もこうだった。女なんて、みんなこうだ。内村は、吐き気をもよおすほどの嫌悪感を感じた。

「てめえのような女を見ると、ヘドが出るぜ！ 牝豚め」

まなじり  
眦をつり上げ、汚物を吐き出すように怒鳴りつけると、内村は警棒で女のむきだしの腹を思いきり殴りつけた。

グエツと、蛙を踏みつぶしたようなおぞましいうめき声をあげ、女は白目をむいて喘いだ。

内村は、血のこびりついた警棒で女をめったうちになると、サイドブレーキを外して車から飛び降りた。

RVはジリッジリッと前に進み、車輪止めに土を盛り上げた所で、いったん止まった。その下には千尋の谷底が口を開け、鳶の絡みついた広葉樹が、視界を覆い尽くすほど生え茂っている。

「ここから墜ちたら、めったなことでは発見されまい」

内村はリアバンパーを握り締め、渾身の力をこめて車を押した。

こめかみに静脈が膨れ上がり、弓なりに反り返った身体に筋肉が浮き上がる。エンジン

が吠え、前輪が土を跳ね飛ばしてじりっと前に進む。

（やめろ。警察官のくせになんとかをやるんだ！）

意識の奥底に封じられていたもう一人の自分が必死に声をあげ、はっと手を緩めた途端、土砂を乗り越えて宙に躍り出たRVは、崖にバウンドして、フロントガラスを粉々に碎かれ、緑の樹海に吸い込まれていった。

遙かな谷底から、車の粉碎音と女の断末魔の悲鳴が響きわたった。

## 第一章

### 1

私、増井繭子ますい まゆこは渋谷にキャンパスのある光學院大学の三年生。黒川美紀くろかわ みきと友達になったのは、二人とも札幌の出身ということがきっかけだった。

初対面るとき、美紀のことをなんて綺麗な人きれいなひとだろうと思った。

顔の造形が整った人はどこにでもいるけれど、あんなにきめが細かくて吸いつくような肌をした人には、いままで会ったことがない。一年生の夏、気のあう仲間達と海に行ったとき、まわりの男性が美紀にばかり見とれるので、他の女子が怒って帰ってしまったこともある。

私だってまるで自信がない訳ではないけれど、美紀と比べたら月とスッポンだ。

それでも最初は、勉強だけは負けないと思っていたけれど、前期の試験が終わるころには勉強でもまるで歯がたたないことが分かった。

美紀が光學院大学を選んだのは、インカ文明の研究では世界的に有名な武田篤志たけだ あつしという教授の元で勉強するためだ。私は自分の偏差値で入れる一番いい大学だから、光學院を選んだにすぎない。